Tokkatsu の共同授業研究による日本人学校と現地校の協力体制の構築の試みと検討
－カイロ日本人学校とエジプト日本学校における学級活動⑴および⑵の実践的研究からの報告－

○天野幸輔（名古屋学院大学）　○鈴木純一郎（多摩市立貝取小学校）　山田真紀（椙山女学園大学）　平田幸男（至学館大学）

１．日本人学校における現地校との交流の現状

日本人学校（在外教育施設）においては，その国や地域の特色を活かして，児童生徒に対する国際理解教育や現地理解教育が行われている。それには児童生徒による訪問・調査活動，現地校等との交流活動もある。授業見学，行事への招待や共同参加が一般的である。Japan Day を利用した交流活動を行う日本人学校もある。

その前提は，日本人学校と現地校等の教員間の交流活動である。大部分は長年の交流に基づいた，特定の学校との関係の継続である。2～4 年で派遣期間終了の日本人学校教員にあっては，新たな交流先を開拓することは難しく，既存の交流活動・関係の維持，継続が中心となる。

では教員間の交流の在り方として，「教員ならでは」の活動とは，どのようなものが考えられ，提案，実践できるだろうか。相互訪問による国民性や学校観，教育観，方法の違いを発見，探索するような交流活動を脱し，互いの授業実践から学び合い，協働して新しい授業や教育活動，研修の在り方を構築，創造していくような交流活動として，何が構想できるのであろうか。

本報告においては，この問いにエジプトにおけるカイロ日本人学校（以下，CJS）とエジプト日本学校（以下，EJS）の教員間の Tokkatsu 共同授業研究で応じたい。特別活動を日本側が「指導する」関係性ではなく，共に学び，既存の授業やその方法を疑ったり，新たなものを創造したりする教員間の交流活動とは，どのようなものであろうか。そうした目標を掲げた活動において，ねらいは達成されているのであろうか。2023 年後半の事例をもとに考察する。

２．CJS での学級活動⑵の授業研究会

9 月 18 日に EJS 教員 10 名を CJS に招いて，公開授業に基づく授業研究会が行われた。小学部１・２年生 6 名を対象とした「ばい菌バイバイ！手洗い名人になろう」を題材とする学級活動⑵が実践された。手洗いの習慣がエジプトの学校にはなかったが，Tokkatsu の導入やコロナ禍を通じて重要性が認識されている問題を取り上げたことで，協議の場では EJS 教員から積極的な意見発表や質問があった。Tokkatsu が導入されているからこそ，同じ授業を見て，建設的で踏み込んだ議論が展開されたといえる。

３．EJS での学級活動⑴の模擬授業と研修

12 月 28 日，EJS において EJS と CJS の教員を児童役，日本人調査研究メンバーを教員役，議長団役として，研修を目的とした学級活動⑴の模擬授業を行った。議題を「小学生の集団が，みんなで楽しめるレクリエーションを決めよう」とし，決定したレクリエーションを，その場ですぐに全員で実際に行った。その後，得たことや考えたことについてグループインタビューを実施した。両国の教員が児童役を務める中では，教える・教えられるという立場は存在しないので，よりよい学級活動の実現を目指して，同じ目線で協働する研修が実現した。

４．「共同授業研究」という日本人学校と現地校の新たな交流の在り方

他国への教育内容の移転では，文化的な侵略・帝国主義に陥ってはならない。両国がともに学び合える研修はどう成立するのか，という問いに答えることは，Tokkatsu を中心に据えた，世界の日本人学校の交流活動のモデルとなり得る。

※本研究は，令和 5 年度文部科学省「日本型教育の海外展開（EDU-Port ニッポン）」調査研究「非認知能力の育成に向けた特別活動の国際化と質保証に関する研究」の助成を受けている。